Back Number

本論文は

世界経済評論 2023 年 7/8 月号

(2023 年 7 月発行)

掲載の記事です

世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料
1,320円×6冊=7,920円 ▶ 6,600円 税込
17% 送料無料 OFF

富士山マガジンサービス限定特典
定期購読期間中 デジタル版バックナンバー読み放題!!
※通巻682号以降

世界経済評論　定期購読

[24時間・年中無休]
0120-223-223

お支払い方法
Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

人体の堆肥化，緑の葬式

佐藤 紘彰

地球温暖化，気候変動への懸念が高まるとともに死後の人体を堆肥化（composting）する動き，緑の葬式への関心が増えている。それに関わる記事の一つは，「自然にお礼をしたいと思えば，身体をあげなさい」という。

人体堆肥化実験

これは葬儀屋 Caitlin Doughty による特別寄稿（New York Times, 2022 年 12 月 5 日）で，この人は死と葬儀屋業について三冊の本を書いている。8 年前ノースカロライナの森に横たわる死骸に木屑をバケツに入れて持って行った。Western Carolina 大学には法医学的人類学と人体腐敗の研究所があり，その人体堆肥化の実験に立ち会うためだった，と始める。

現在，ワシントン，オレゴン，バーモント，コロラド，カリフォルニア，およびニューヨークの六州が人体の堆肥化を法で認めている。うちニューヨークはこの記事が出た月の最終日に，ホークル知事の署名を得て法律が成立した。

人体堆肥化を推進をする Katrina Spade は 2014 年，非営利団「都会死企画」（Urban Death Project）を創設した。スペイドがこれを考えたのは，自分も死ぬ運命にあることや家畜死体の堆肥化を考えている時で，たとえばブルックリンの家並みを歩いている人が地区の人体堆肥化施設に出会うとしたらどうだろうかと想像した時だという。

ブルックリンといえば有名な Green-Wood 墓地がある。この墓地は 1838 年にでき，その後，「五番街に住み，セントラル・パークで新鮮な空気を楽しみ，グリーン・ウッド公園で両親と眠るのがニューヨークっ子の夢」と言われた時代があった。大きさはほぼセントラル・パークの半分。

スペイドは，1977 年，医者と医者助手の間にニューハンプシャーに生まれ，「家族は宗教的ではなかったが自然を霊的なものと見なした」というから神道に近い。マサチューセッツ大学アマスト校で建築学を専攻，修士号論文は「都会で死ぬ人のための場所」と題し，様々な生態系を推進する団体 Echoing Green の気候研究費を得た。

そこで「都会死企画」を創設した。これは 4 年後解散，それに変わるものとしてワシントン州に Recompose を設立，人体を堆肥に変える方法について特許申請をしている。

ムラサキウマゴヤシを添える

申請の人体堆肥化特許を見ると，死体を木屑や紫苜蓿（alfalfa）などと一緒に器に入れて，通風をよくするよう扇風機を添える。一か月ほどで肉体は溶ける。その土壌は家族が土に埋めて木を植えるのもよし，ワシントン州最大の土地保全機関 Forterra を通じて森林保持に寄与することもできる。

Doughty が図示する人体堆肥化の器は，「日本の capsule hotel」のような円筒を使い，それに藁や木屑や紫苜蓿などと死体を置き，花などを添えるとある。骨は cremulator で粉砕して土に混ぜる。乾くとほぼ一立方メートルの新土壌ができる。これに木を植えるもよし，云々。スペイドは，向こう二，三十年内には「人体の堆肥化は火葬を上回るだろう」という。

骨癌で死んだ若い女性

もう一つは Tara Bahrampour という記者の「地球の将来を助けるために，1860 年のように埋められる人が増えている」（Washington Post, 2023 年 3 月 28 日）と報ずる。Mia Zinn という中学校で生態系クラブに所属していた女の子が稀な骨癌で 17 歳で死んだ時，その父は家族の住

むメリーランド州にある墓地と樹木園を兼ねたSerenity Ridge Natural Burial Cemetery and Arboretumに行き，娘さんを竹の籠に入れて簡単な布で覆ってそこに埋めた。

このような「自然の，緑の埋葬」は，アメリカでは1860年まではごく普通のことだった。ところが，翌年南北戦争が起こって多数の戦死者ができると，死体を防腐保存物で処理（embalming）してそれぞれ出身地に送ることになった。ついでリンカーン大統領が暗殺されて，その遺体を議会に二日間安置，それから葬式列車を組んで三週間かけて駅ごとに市民の黙礼を得ながらリンカーンの出身地イリノイ州スプリングフィールドに運んだが，以後，防腐保存と高価な棺桶を用いるのが流行になったという。

現在アメリカでは57%が火葬を，37%が「伝統的埋葬」を選ぶ。火葬は華氏2000度（摂氏1100度）の火を2時間燃やす必要があり，これは自動車を500マイル（800キロ）走らすのと同じで，地球温暖化の元凶とされる二酸化炭素233キロの放出に相当する。これに対して自然葬は20キロ以下，伝統的埋葬のそれは883キロとなる。

アメリカ全体では，後者は毎年コンクリート160万トン，鉄鋼6万4500トンを必要とするが，これは サンフランシスコの金門橋を一つ建てるに近い。加えて防腐剤430万ガロン（1万6,000立法キロ）を必要とする。コンクリートと鉄鋼は埋めた棺桶の腐敗を防ぐために使われる。

こうしたburial vaultを調べると，「日本や中国では前代未聞」とある。

水葬

他に，アルカリ水主体で満ちた大壺に死体を入れる「水葬」があり，これは簡単で，二，三時間で人体は溶ける。その水液は豊かな肥料として土壌に注ぐことも，下水に流すこともできる。

しかし，これを引く「様々な緑の葬式の比較」というMichael Corenの記事（WP, 2023年1月31日）は結論で次のように指摘する。オランダの維持可能性研究者Elisabeth Keijzerによると，気候変化への打撃の観点からすれば，最悪の埋葬法でもオランダ人平均の人生の0.03%に過ぎない。それがアメリカ人になると，人生全体での気候変化への寄与はその2倍になるから，埋葬法のそれはそれだけ低くなる。とすれば，温暖化悪化への寄与から見ると，埋葬方法より毎日の生活の仕方が重要だという。

戦場の荼毘，斉昭の命令

戦場で死んだ人を防腐保存で処理すると聞くと，日本の人は戦場で死んだ人をすぐ荼毘して戦友が骨だけを骨壷に入れて持って帰っていたことを思い出すにちがいない。英国のCremation Societyによると，日本は火葬率が99.97%で最高という。日本の火葬はいつ一般的になったのか。万葉集の大伴家持のころはまだ土葬であったようだが，のち和歌で「けぶり」といえば火葬を指した。

この火葬を幕末の水戸の斉昭は天保4年10月領内で禁じた，と山川菊栄は『覚書　幕末の水戸藩』で書く。斉昭は「釈迦といえるえびす男，今の世に生きてあるにせよ，汚らしき異国人なれば，たやすく貴人などの前に出ることを得べきものにあらず」と述べ，火葬はこの釈迦に起因するからダメだと決めたのだ。土葬は水戸では光圀以来武士の間ではやっていたが，斉昭の命令でその後百姓町人までそうした。

ユダヤ教とイスラムは死体はできるだけ早く布に包んで埋めるよう教える。これは「緑の埋葬」に近いが，東方正教会も同じらしい。そのため何かそうした地域で紛争が起きて多数の死人が出ると，こんもり土をかぶせた写真や動画が示される。

一方，キリスト教でもカトリックは土葬をまず考えるが，近年火葬の率が高まっているという。

さとう　ひろあき　翻訳家，コラムニスト在NY